ドクター元ちゃんがんになる

闘病支えるチーム医療

「かかわる時間」増え専門性充実

西村 元一
金沢赤十字病院副院長

一昔前、入院中の治療は医師が中心であり、看護師や薬剤師がかかわるとしても、医師の「命令」に従って動くことが一般的でした。このため、患者から見れば医療をしてくれるのは主治医だけであり、主治医しか目に入らないと言っても過言ではありませんでした。

一方、医師から見れば患者は「数多くいる患者の1人」に過ぎず、患者が「自分にかかわってくれる時間が少ない」と、不満足になることも少なくありませんでした。外来も同様です。ほぼ全ての医療が、医師の指示で動くということもあり「3分診療」というような言葉が生まれることになったと思います。

しかし、20年ほど前から「チーム医療」という概念が広がってきました。さまざまな分野で、医師だけではなく看護師や薬剤師などのスタッフがチームを組み、一人一人の患者の治療に当たるようになったことで、医療者が患者にかかわる時間が増し、医療提供環境の改善につながっていると思います。

=望月亮一撮影

さらに、看護師や薬剤師など職種ごとに「専門○○」「認定△△」などと専門性が取り入れられるようになったり、診療報酬が付いたりするようになったため、チーム医療に取り組む臨床現場が増え、治療だけではなく、「感染対策チーム」「栄養サポートチーム」「緩和ケアチーム」など多様なチームが活躍するようになりました。

医学の進歩によって、医師が一人ですべて習得することは不可能になっています。私もがんと分かる前、がん医療の最前線で患者の皆さんと向き合っていた際は、抗がん剤治療に関わる看護師、薬剤師とともに化学療法チームを作り、抗がん剤治療を主に外来で受ける人が、少しでも安心して治療を受けられるようなサポートに努めました。

実際に自分が入院することになると、栄養サポートチームや緩和ケアチームなどさまざまなチームのお世話になりました。専門家の集まりなので、いろいろな疑問もすぐに回答をもらうことができ、その的確な指示や対処のおかげで「助かった！」「楽になった！」と思ったことは1回や2回ではありません。たとえば、初めはちょっとした痛みでも不安でしたが、緩和ケアチームの回診で精神面を含めたケアで楽になってからは、緩和ケアチームの回診を心待ちにすることもありました。

患者としてチーム医療を経験してみて感じたことは、「多くのスタッフが自分にかかわってくれている」と実感できることが闘病意欲につながるということです。ただし、チーム医療が「いいことばかり」とも限りません。役割分担が進みすぎて、「患者の全体を把握しているのは誰なのか」と疑問に思うこともあります。実際、受け持ちの看護師に薬について聞いたとき、「薬剤師に聞いてください」と返答され、ちょっとさびしい思いもしました。チーム医療が進めば進むほど、医療者と患者とのコミュニケーションが大事になるとともに、医療者は情報の共有をしっかりとすることを肝に銘じる必要があると思います。

＝次回は9月4日掲載

にしむら・げんいち　1958年金沢市生まれ。83年金沢大医学部卒。金沢大病院などを経て、2008年金沢赤十字病院第一外科部長、09年から現職を兼務。13年から、がん患者や医療者が集うグループ「がんとむきあう会」代表。